

III

しんぼるの文化

1 歌とダンス

〈アモアモ〉というのは娯楽的な要素の強い、いわゆる歌であり、〈ワイアモ〉というのは〈アモアモ〉に似たメロディーはついているがその内容、行なわれる形などから口承と考えてよいだろう。〈アモアモ〉は男女とも行なうが〈ワイアモ〉については男性に限られている。

〈アモアモ〉内容的にはごく簡単で、例えば「鳥が森へ飛んでいった」という歌詞をくり返しうただけである。また単にメロディーだけで歌詞のないものもある。

これをおこなう時は、1人で最初から終わりまで同じ歌詞をくり返すこともあるが、たいいていの場合、多人数で行ない、その形式は、まず1人がリードをとり、そのあとで残りの者が同じ歌詞をくり返すというものである。この場合、残りの者の歌はあまり合わず、ばらばらだが気にしている様子など全くない。〈アモアモ〉は男女とも行なうが、ただ男性たちがうたう時は女性は誰ひとりとして参加せず、女性がうたう

時の男性についてもこれと同じである。

女性の〈アモアモ〉にはダンスをとまなうものがつねである。うたい方は1人のリーダーのあとを全員がくり返しうたうのだが、これにダンスがつく場合この〈アモアモ〉をしながら手をつなぎ、日本の“花いちもんめ”のように前へ行ったり後へさがったりし、ときたま足を地に数回たたきつける。これも調子がのってくると、手をつないだまま部落の中を走り回るようになる。女性がうたったりダンスをしたりしている時の男性はこれにはあまり注目せず、たまに笑ったり、やじをかけたりするぐらいである。男性がうたっている時の女性もこれと同じである。

男性の歌も、形式や内容は女性のものと同じであるが、男性が〈アモアモ〉において踊っているのを見かけたことはなかった。歌のうたい方は、腕で口をふさぐようにして、声をこもらせて歌う。女性が歌う時はこのようなことはし

ない。歌のリーダーにだれになるかはとくに決まっていないがその歌の持ち主がリーダーになることが多い。つまり各部落、各個人で持ち歌があるのだ。我われがテープレコーダーに吹き込んだ歌を聞かせた時、『これはどここの部落のだれの歌だ』と彼らはみごとに当てたものだ。

彼らは非常に歌が好きで、夜の8時ごろから朝方の5時ごろまで続けて聞かせてくれたことがあった。ふつうは、だいたい日没後2時間ぐらいから1～2時間かけて行なわれる。しかし祭りの時は、夜だけに限らず1日中、歌やダンスをする彼らである。

女性の歌一（シリアナ族ロベルト部落）

Te u Teu Ma a Teu Teu Ma
Ca de de Ca de de Ca de de
Ma Ra Jā ya Jā a~a Ca de de Ca de de

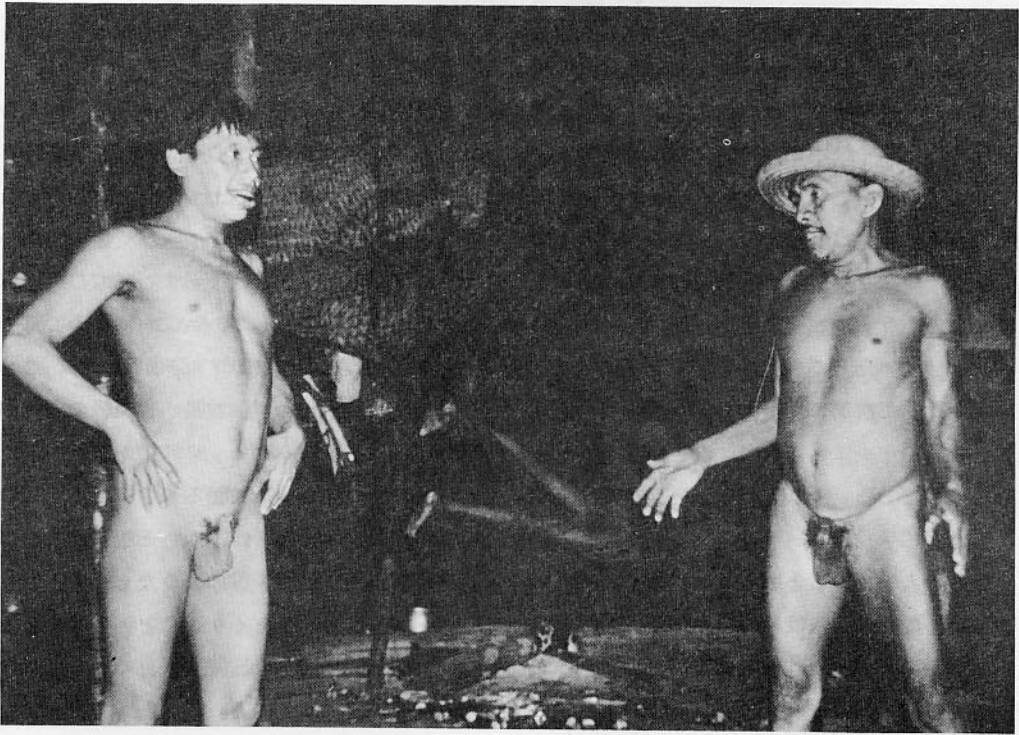
男性の歌一（シリアナ族ロベルト部落）

e e J_i J_i Ca e e~e

男性の歌一（ワイカ族ジャコ部落）

a~e Ca a~e a~e Ca a e e e a~e e
a~e e a~e a~e e a~e e

〈ワイモア〉の一節一（ホコテリ族）



〈ワイアモ〉 これは〈アモアモ〉とはちがってニュースや伝達事項などに節をつけるのと、収穫や他部落に関した事など、ひとつの話しになるような内容のものである。これはたいてい1人か、あるいは相手役としてもう1人の、2人で行なわれるのがつねである。2人で行なう場合、1人の方は次ぎから次ぎへと詞に単純なメロディーをつけてうたっていき、相手方の1人が3小節に1小節ぐらいの割合いでくり返し歌うのである。例えば一方が『バラフリ族で／バナナの実が／よく実っている』とうたえば、相手方が『よく実っている』と最後の部分だけをくり返すのである。

具体的な事例として、ロベルト部落にやって来た、ホコテリ族（デミニ河のトトビ河との出会いよりさらに上流に住む）のダヴィ首長以

下数名によってなされた〈ワイアモ〉についてあげてみる。

夜の8時ごろ、まず1人の男が小声でハンモックに横たわったままブツブツと言い出す。この声に受け答えるように、離れてハンモックに横たわっている他の1人の男がブツブツ言い始める。この場合、両者とも節はつけずに行なう。そして次第にその声は大きくなっていき、これを始めた者がハンモックを離れて部落の中央に出始める。そしてもう1人の男も同じように出てくる。さらに語りには力が入り明確な節がついてくる。この節については4～5種のものをくり返しているようである。このときの2人は弓矢を持ってそれを上げたり下げたりしながら語り続けた。中央に出た2人は、次第に間隔をちぢめ、つい

には抱き合うようになる。このころには語りも絶頂に達しているらしく、息づかいも非常に荒い。そして抱き合った2人は部落の中央でそのままの状態ですわり込む。その後、語りをしばらく続けて、やがて急に終える。そしてリードをとっていた1人がハンモックに帰ると、今度は残った1人がリード役として、また小声でブツブツ言うところから始めるのである。すると、どこからかハンモックに横たわっていた者が相づちを打つように始めだす。そして次第に声は大きくなり、彼らがまた部落の中央に出てきて、前と同じように始めるのである。それが終わると、今度はそのときの相手役がリード役となり、また別の人間が1人出てくるといった形式である。この場合、最初の2人は弓矢を持ちながら行なったが、次ぎの2人は何も持たず、手で何かを植え付けているような動作をしていた。この

ようにいろいろなカップルにより所作を変えて行なわれて、結局この時は6種類を7名によって行なわれた。

所要時間は最も長いケースであって、ひとつ平均が30分前後で、この〈ワイアモ〉が始まって終わるまで3時間以上も要した。迫力の点からいえば、この〈ワイアモ〉は〈アモアモ〉などとは比較にならないほどすごいものである。

これ以外にも前記した、ニュースやその日の伝承事項としての〈ワイアモ〉があるが、これは踊りなどは伴わず、首長が首長級の人物が朝方あるいは夜にハンモックにでも横たわりながら、若干の節をつけて語るものである。この場合も相手役となる者が1人いる場合が多いが、前述のワイアモの相手役のようなものではなく（リード役のことばをくり返すというものでなく）、語り手に対し、質問や意見のようなものをいっているようである。

